

# 人生の意味

M・J・ランゲフェルト

西欧の哲学においては、古くから人間は「理性的動物」であると言われて  
います。人間をこの様に呼ぶのが正しいとすれば、これはつまり、人間は動  
物ではなく、自己形成的理性的な「生きもの」であることを意味すると、言  
いたいと思います。更に理性的であることは、それだけでは「人間的」であ  
ることを意味しないと、言いたいと思います。人間は「理性的」ではあり得  
ても、果して……道理を弁えていると言えるのでしょうか。人間の理性の限界、  
つまり人間の知性的、認知的、論理的な思考の限界を弁えることは、理性的  
なことです。道理を弁えることはそれ以上の事柄であって、それはこのよう  
な関連でいえば、謙遜の念を発達させること、時折生起する合理性以外の  
人間の魂の諸側面に考慮を払うことを意味します。人間の理性の活動だけで、  
あらゆることを本当に知り理解することが出来るものかどうか、疑問に思  
う人もあるでしょう。人間は、愛と献身において、道徳的な真理において、芸

術の美において、人間的<sup>○</sup>社会<sup>○</sup>関係<sup>○</sup>における<sup>○</sup>信頼<sup>○</sup>性<sup>○</sup>と<sup>○</sup>責任<sup>○</sup>性<sup>○</sup>において、人生を営むのでしょうか。それとも合理的な知識<sup>○</sup>においてのみそうするのでしょうか。あるいは、人間の人格、人間の精神、人間の「心」には、別の側面があるのでしょうか。「合理的な知性」ばかりではなく、「感性的な知性」もあるのではないのでしょうか。合理的な思考ばかりではなく、英知もあるのではないのでしょうか。合理的な論議に関する真理ばかりでなく、犠牲や信仰や誠実さや忠誠心に関する真理もあるのではないのでしょうか。自然や芸術や人間の生活史における美に関する「真理」もあるのではないのでしょうか。人間は「理性的動物」であるという考えを生み出したギリシャ人の文化においても、偉大な劇作家の偉大な悲劇に関する真理や、偉大な詩人達の叙事詩に関する真理もあるのではないのでしょうか。

随分以前に申し上げたことがあるのですが、おそらくキリスト教の終焉は西暦 325 年に始まったと言ってもよいのではないのでしょうか。つまりその年に、キリスト教の神学者の会議が召集され、彼等はキリスト教神学の教義と彼等の念頭にあったキリスト教の教義を非常に合理的に定式化したので、それ以来、教義化は余りにも合理主義的な過程を辿ることになったのです。その過程は余りに合理主義的になり過ぎて、人間の尊厳性には似つかわしいものではなくなってしまったのです。

ギリシャ哲学の伝統は、ラテンの伝統と共に、早くから強力な合理化の道を辿ってきました。この合理化は、後にそれに反対する思想や人間諸科学の成長があったにもかかわらず、自然諸科学や数学の発達によって、強力に支持されています。しかし人間の尊厳性はこのような合理性に源泉を持つものではないのです。

人間は、我々が知るあらゆる文化の歴史上極めて早い時期から、理性や合理化以上の域に達しています。人間は合理的精神という橋を越えたところに、希望する事物の世界、見えない事物の明証性、宗教の世界、理解されていないもの世界、信仰の世界、犠牲の世界、神秘の世界、愛と無私の世界、美の世界、善と正直に対する人間的献身の世界があることを知っています。人

間が目にしてしているのは、人間の最も崇高な尊厳性と共に最も深い失敗の淵へと到るこの合理的精神の橋なのです。

もし人間が、この合理性の橋を真に越え、精神には見え心では理解出来る世界へ到らなければ、人間が人間生活の最も誇るべき実現をなしたとしても、それは人間と人間の世界が達すべき最高の理想には決して達しないことは、以上のことから明白です。万が一、人間がこの理想に完全に到達出来れば、人間自身と人間世界は完全無欠なものとなるでしょう。「完全無欠」とは完結したという意味です。それ以上にはよくなり得ないということです。

さて皆様、私の確信を申し述べることをお許しいただきたいと思いますが、純粹にただ単に理性的な生きものは、人間が自己自身と自己の生活と自己の世界を私が申し上げようとした意味で「完全無欠」なものに出来るとは、決して信じられないということです。これが私の偽らざる確信なのです。しかし同時に、人間は最も深い謙遜と最高の献身によって、人間的なもの以上の世界、理性的なもの以上の世界、つまり絶対的価値の世界へ到達すべく、この道を歩んでみなければならぬというもの、私の偽らざる確信です。そしてご承知のとおり、古いラテン語では、事物は単に量や合理性によって価値が決まるのではなく、質によって価値が決まることが、極めて明確に述べられています。

ここで我々の注意を人間に向けてみましょう。どの人もこの世界で唯一の存在です。どの子供も唯一の存在です。従って我々は、特定の個人であれ、と言わなくてはなりません。というのは、それは、あなたはあなたの本当の質を示しなさい、という意味だからです。その時にのみ、我々は我々の人生を生きることが出来ます。そしてその時、他の人々は質の世界へ方向づけられるのです。合理性は我々の役に立つかも知れませんが、我々は我々の魂をこの合理性にのみ向けることはしないでしょ。合理性は有用なものではありません。従って合理性には、手段的な位置を与えておきましょう。我々が現に今そうしているように、我々は計画した場所に集合しています。それが合理的な決定というものです。我々はお互いに交流する際に言語を使います

が、これはお互いに大変役に立ちます。私は合理的な方法で私の思想を説明しようと思いますが、その途中ですでに、人間理性は合理的であるがゆえに限界のあることが、我々の目にも明らかになるでしょう。

従って皆様、我々が人生の意味は何であるかという疑問を自らに問う時、我々は困難な問題を通り抜けなければなりません。まず第一に、人生は現にその人生を生き抜いている個人にとってのみ意味があるのではなく、彼は、自分の人生は両親にとって、結婚する相手にとって、子供にとって、友人にとって、同僚等々にとって、どんな意味があるのか、理解しなくてはなりません。しかし又、同じ関係においてもいくつもの異なった意味があります。例えば、ある人が様々な個人的な資質によって、肯定的に受け容れられても、職人や市民等々としての資質においては、肯定的に受け容れられないということもあるでしょう。

さて皆様ご存知のように、人間は傷つき易い生きものです。従って、男女間におけるように生物学的に仕事の区別が存在するばかりではなく、労働課題間や技能間等、さらに援助と指導、援助者と被援助者の間等々における仕事の区別があります。人間の人生は、従ってこの様に異なった仕事すべての基礎の上に成立っているのです。そこで傷つき易い人間を助ける有力で有能な援助者になることが、人生の本質的な意味のひとつになるはずで、そして援助者は皆、彼もまた人間である点で、自己自身を助けることが必要となるとしても、彼の主要な課題は、善良で信頼出来る援助者になるばかりではなく、誰もが必要とする最少不可欠の援助以上の援助を要する人間に、自己自身をしないことでもあります。従って、人間は自己自身を助けることが出来なくてはなりませんし、また同胞を助ける用意が出来ていなくてはなりません。

そしてここにこそ、人間についての解答と人間の課題の全体が示されているのです。つまり人間と人類に対する考慮と責任、援助の能力と意欲がまさにそれなのです。しかし人間はそれ以上のことを受け容れなければなりませんし、その時にこそこれらの多くの事実が真の価値を実現することでしょう。従って、人間は集団の中で共に働き協力しなくてはならないばかりでは

なく、人間の意欲的な態度や社会的な協力が、不可欠の価値になるのです。そして我々は援助し協力しようとする他人の意欲を食いものにしておいてはいませんが、幼い子供や老人や病弱者等々の無力な人々は、この世界の中で安全に（保護）されなくてはなりません。

我々が忘れてはならないことがひとつあります。それはつまり、人間は自分で生まれてくるものではないということです。責任は両親と共に始まったのです。そして教育によって二つの事実を教えずにはなりません。ひとつは、人間は自己自身に対する責任を徐々に引き受けなければならないということ、もうひとつは、自分の子供達が自分の責任の下へと生まれてくるということです。そして「責任」というのは良い言葉です。この言葉は、我々が応答しなければならないこと、解答を与えなければならないことを意味しています。ところでこの解答は信頼し得る、真実で、正直なものでなければなりません。と言いますのは、さもないと、どの人も人間関係を保って生きていくことが出来なくなるからです。我々は人生をまず、人生の真の成就に対する意味ある解答とみなさなければなりません。人間の人生はただ単に生物学的な過程でも、生きている機械でもありません。それは人間の可能性の実現であるのです。

人間が自己の最善、最高にして最も緊急に必要とされる可能性にまで自己を開発し切っていないことを、我々はしょっちゅう目撃しています。人間が自己の価値ある可能性の基礎においても最頂点においても活動していないことも、また余りにもよくあることです。人間は他の人の献身から利益を受けません。これは、恋愛関係にある時や無力な状態にある時には、その人の特権になるかもしれません。しかし彼は常に先ず、自分自身の有用性や能力を提供しなければなりません。従って人間は自己の能力を開発しようとしなければなりません。そして教育において、我々は彼の能力を引き出し形成しなければなりません。創造性において、人間は空虚な夢の中へ逃避するのではなく、この創造的な有用性を作り出し、刺激し、援助し、指導して、最も単純な奉仕から最高度の道徳的・宗教的・美的・社会的な価値を生み出していき

ます。このことはすべて必ずしも合理的なことではなく、あるいはただ単に合理的なことでもありません。それは成長する価値、最高の価値を持った人生を作り出すことなのです。我々はより低いレベルの成就である単なる生物学的な意味で生存することも出来ます。それを受け容れることは時には不可欠のことかもしれませんが、我々はこのような橋を越えて、より高い、より良い、より価値のある世界へと進んでいく努力をしなければなりません。そうすることによって人間の人生は、機械的な最少限の過程から最高の完成へと成長して行きます。他の人々の人生と共に彼自身の人生、そして彼の子供達の人生に対する責任は、今や最善、最高の価値へと成長して行くのです。我々は幾度となく、「意味」や「価値」という言葉を使ってきましたが、我々は今や、人間が意味や価値へ向かっている時、何か非常に注目すべき事柄が起こりつつあるという事実を考慮を払わなければなりません。その時、人間は身体の世界を去るのです。このことを説明してみましょう。

私が太陽を指差す時、私の指し示している指の意味を理解する人は、その指から目を離して、私が指し示している対象物の方向に沿って目を向けていきます。この対象自体は見える物体、つまり太陽ですし、私の指も目に見えます。しかしこの両者の間には見えない線、つまり私の指し示している指の見えない意味があるのです。従って言葉の意味は、時には非常に具体的な事物を指し示し、時には非常に抽象的な考えや非常に難しい観念を指し示す抽象的な方法なのです。例えば私が「神」や、一曲の音楽の美しさや、数学の複雑な構造について語る時がそうです。人間は身体の世界を抜け出て、言葉により、歌声により、または尊敬や宗教的意味を表現する手や腕によって指し示すことの出来る様々の事物の意味に参入します。しかし人間は、自分が使用する言葉や画く絵画、あるいは作曲する音楽を通して、自分の同胞に自己自身を理解してもらおうのです。こうして彼の同胞は、しばしば最も深い意味や、自分で考えたこともない事物へ到る方法を見出すことが出来るのです。人間の顔や目の表情は、言葉では言わない多くのことを示します。

しかし皆様、我々が「文化的な生活」とその「歴史」と呼ぶものは、最も深

い意味で、また最も悲劇的であると共に最も印象深い意味で、人間世界を構築する人間の偉大な産物を指し示す二つの方法なのです。人間の意味の世界に関する悲劇的産物および偉大な産物は、それぞれが文化的・歴史的な文脈を持っており、それらに独自の意味の世界に関する独自の答えを、人間に与えます。それぞれの文化の世界、それぞれの文化の側面は、人間に印象的な産物を提供します。このような文化の諸産物は、個々人や、ある歴史や、ある共同体に対して独自の意味を持っています。そして今日の時代には、世界の多くの場所において、文化的文脈が瓦解し、多くの人々にとってもその中心的な意味を失ってしまったことを、我々は目撃しています。今日人間は、例えば宗教に対する開かれた態度や、自国の過去の芸術に対する開かれた態度、芸術の他の側面についての理解、あるいは自国の歴史に対する開かれた態度を失ってしまった場合が多いのです。そして皆様、人間を幸福にして来たもの、あるいは人類のより深い問題への入口を人間のために開いてきたものを、人間から取り去ることはさほど難しいことはありません。しかし我々がこの人間にとって大切なものを台無しにしてしまったとしたら、我々は人間に、同程度に高い質を持ったものとして何を提供することが出来るでしょうか。今日我々は、質の高いもの、あるいは深い英知を持ったものを人間に取り戻していないことが余りにも多いと言えるのでしょうか。最近では、我々は若い人々に最も深いものや最も高いものを学ぶためにほんの短い時間しか与えておりません。そして我々は何がそれにとって代わっているかを知って、愕然としてしまうのです。つまり未熟な意見、攻撃的な絶滅行動、非行の増加、社会や経済や政治の分野における思い上がった頑な意見がとって代わったのです。

しかしこれらのことはすべて一朝一夕に起こったわけではありません。既にかなり以前から、つまり18世紀には、人間が自己自身の理解を見失う危険性を表現する新しい言葉が作られました。即ち「疎外」という言葉です。その後かなりして、西欧の哲学者達は、人間が世界の宗教的理解を失いつつあるという問題を定式化し、19世紀の初めに彼等は「神は死んだ」と叫んだの

です。その後しばらくして、政治学者にして経済学者であったカール・マルクスのような人が「人間疎外」、つまり自己自身の理解を失った人間の「疎外」のことを語ったのです。そして人間はますます純粋に合理主義的な態度へと後戻りをし始めるのです。即ち人間は再びますます、合理的なものが彼の存在の問題を解決すると信じるようになるのです。我々の時代は再び、この合理的なもののみを過大評価をその特徴としております。間もなく我々は籤で遊び、我々が愛する最も身近な人を統計的な賭だけで見つけるようになるでしょう。このようにして我々は、人間の最も意味深い創造は、愛と献身<sup>○</sup>身<sup>○</sup>における<sup>○</sup>人生の意味と価値の発見であり、人間世界における人間の真の安全<sup>○</sup>さに完全に自己を委ねることであることを、徐々に忘れ去ってしまうでしょう。つまりその安全さは、人生における安全さであり、子供や老人や病弱者や貧乏人や無力な人々がその弱さのままで安全であることを意味しています。しかしこの「安全さ」は、子供を甘やかし、望みや激情や快楽をすべて自由に任せることによって、性格や人格が破壊されてダメになった子供のよう<sup>○</sup>に、人間を甘やかしてダメにすることではありません。ところが安全さは人間が気ままや、自分本位の自己中心的な幼なさや子供っぽさや傲慢を許容するための安全さを意味している場合もありますが、安全さはまた絶望や無力さに抗して立つ人間の安全さでもあるのです。我々人間は、同胞が安全である場合にのみ、人間生活の目的を実現するのです。しかもそれは身体的に安全であるばかりではなく、最も本質的には、人間の可能性のあらゆる領域で、意味ある行為をし奉仕をし創造性を発揮して人間が創造した、最も単純な価値から最高の価値までを、我々が尊重する場合にそうなのです。従って我々は、単に下僕や主人としてではなく、無力な人を援助する個人として役に立つことが、人間生活の最も深い意味であると言えるのではないのでしょうか。そして他の人を愛すると言える人は、以後は量によってではなく質によって自分を測る試金石を体得することが、確実かつ現実となったのです。

それでは我々は人間の「質」をどのように定義するのでしょうか。それは人間の信頼性<sup>○</sup>、つまり彼が信頼に値するかどうかによるのです。十字架に架

けられたキリストでさえ、神は彼を見捨てたと言った時、信念を失い、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ（わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか）」と叫んだのです。我々がこれらの言葉を、非常に多数の人々にとって非常に神聖な古書の中に見出す時、その言葉を語った人は何世代にも亘る人々の愛を見出ししていたことを、理解しなければなりません。人々は次のことを意味していたに違いありません。即ち、人間の最も深い絶望がそこに表明されており、人々は最も深い絶望の中に居るこの人の傍に立ちたいと望んでおり、他の人間に殺されたこの人、人間に欺かれたこの人、自分が殺されるという経験を神の決断として理解してさえいたこの人の傍に立ちたいと思っていたにちがいないのです。

私はこの話を一種のお説教、つまり宗教的なお説教として持ち出すつもりはありません。私がこの話をするのは、ただ信頼性と人間の絶望の問題が、特定の宗教に対する人間の最も深い確信と如何に深く結びついているかを、示すためにほかなりません。この話をここで用いるのは、我々が、人間の側面、つまり人間の傷つき易さ、言いかえれば人間は援助と支持に対する信頼を必要としていることについて語っていることを例示するためにほかなりません。人間、つまり自己自身を最も合理的な動物と考える、かくも高尚な意見の持ち主であるこの生きものは、自己の弱さ、自己の無力さについても、深く知らなければならない存在であるのです。

従って皆様、人生の目的あるいは諸目的は、人間の無力さという光に照らして見なくてはなりません。人間に過大な自己評価を許してはなりません。我々人間はお互いを必要とし合っているのです。従って信頼性が主要な目的です。しかしこのことは何を意味するのでしょうか。もし人が信頼し得るとすれば、その人は有能でもなければなりません。そしてこの二つの属性は、自分の責任性に関する人間の理解と直接結びついています。と言いますのは、信頼し得る有能さは、責任性に関する新しい発見と新しい前提をもたらすからであります。

私が信頼性、有能さ、そして責任性を、人間の最も明白で最も深い無力さ

の中へ一緒に持ち込もうとする時、人間の無力さとこのような特殊な関係にあるこの三つの目的を、一語で示すことが出来るものでしょうか。もしこのような質を示すひとつの観念ないしひとつの実体があるとすれば、我々は人間生活の目的は愛であると言わなければならないと思います。

「愛は必ずしも「性愛」ではありませんし、必ずしも「恋愛」でもありません。それは責任性と有能さと信頼性の実現に役立つこととも言える、人間に対する無私の最も深い献身であります。

我々が(1)信頼性、(2)有能さ、(3)責任性を、人間生活の目的を実現するための不可欠な前提条件として挙げる時、我々はこれらの諸条件を、人間への無私な献身という意味の「愛」の名の下に結合するのです。

我々の言わんとしていることが、人間の自我中心的な自己集中ではないことを明瞭にするために、我々は人間の有用性という質もつけ加えます。従って我々は信頼性、有能さ、責任性、有用性という四つの質をひとつに組合せることによって、人間らしい生き生きとした生活態度に到達するのです。

さてこれらの言葉の意味と、そこから帰結する内容をもう少し明白にするために、いくつかの注釈を付け加えておきましょう。まず最初に有能さについて述べてみたいと思います。自分は「有能である」と言うには、人は非常に単純な課題も考慮に入れなければなりません。というのは、このような単純な課題は、人間が最も基本的な人生の課題を成し遂げ得る人になるのに役立つからです。例えば自分で食事をとることが出来る、自分の身体を清潔に保つことが出来る、自分の足で歩き、自分の言葉を話すことが出来る、などです。しかしながら有能さに対する要請は年々高まり——従って多くの点で、有能さの限界が身近なものとなってきます。このことは次のような帰結を意味します。即ち我々を取巻く外界は、まず最初に初歩的なレベルの必要な能力にとって有用なものでなければならず、次にますます複雑になるレベルの能力にとって有用なものでなければなりません。このことは、子供が成長するに従って、より無能でない人間になっていくためには、彼を取巻く教育環境に対する依存度を高めていくことを意味します。我々が他の人の有能

さに多くの点で依存していることを認識することが、大人らしさの一側面でもあります。従って有能さと謙虚さ、謙虚さと協力は平行するものです。このことは適切な時に適切な課題に対して、自分の能力を提供したり協力を要請することに対する我々の信頼性を前提にしております。信頼出来る人は、自分に出来ることばかりではなく、出来ないことも承知しています。そしてこの点に彼の信頼性が明瞭に示されるのです。信頼し得る人は自分の能力と限界を共に心得ていますから、(他人の仕事に)介入する場合も、(自分の仕事に)援助を要請する場合も責任を持つのです。

しかし責任性はただこのような協力の過程において示される態度よりは、はるかに複雑な態度であります。と言いますのは、我々は、例えば人間の生や死に対して責任をとるというような最も本質的な場合に、何を我々の責任に引受けたらよいのか十分理解し得ないで行為したり、行為を回避する場合もあるからです。従って有能さもますます多面的なものになります。「有能な大人」であろうとするためには、ますます多くの人生の試練に直面する必要があります。というのは、人間と人間の社会にとって、この制御出来ない試練ほど危険なものはないからです。従って最初から、責任性は人間の教育の一側面として、また同様に自己教育の一側面として、極めて重要であります。人生の諸目標のあらゆる側面は、この有能な責任性の問題を、人間の信頼性の基礎的側面として惹起致します。これらの点で見栄を張る人は、誰も責任をもって人の役に立つことは出来ません。その人の信頼性が前提となるのです。信頼し得る人のみが、有能な有用性を発揮して生き、愛し、働くことが出来るのです。

従って完全な人格的献身を意味するこの統一体の中に、私は人間の目標、教育の目標、そして大人であることの本質を見出していると言ってよいでしょう。

我々が人生の意味を分析し、責任性、信頼性、有能さが、人間にとって最高の価値であるという結論に達した時、我々はまた同時に、さらに二・三のこと、つまり人間の傷つき易さ、人間の感受性、人間の合理性をも発見しま

した。そして我々はこれらを体得しようとする課題を、教育及び自己形成における人間の最も本質的な目標と見なします。さもなければ、人間は真に有効に自分の人生に取り組むことは出来ないでしょう。

「今やこれら七つの側面は、次のようなひとつの創造的な過程に統合されると言ってもよいでしょう。

つまりその過程は、人間的自己と人間的な世界とを創造し、

社会的責任と個人的責任を共に持って、共同生活を創造し、

人間の人格や道徳的価値において、生きた世界概念としての宗教において、芸術において、また人間関係において、表現とコミュニケーションの世界を創造する過程であります。

ここで我々は、人間が身体（の境界）を抜け出ていく問題に立ち戻ることになります。即ち人間は、自分の意図を持つことによって、表現としての自分の言語を話すことによって、さらに表現した理解する人格的主体としての限界をつき破っていく手段として言語を話すことによって、身体境界を抜け出ていくのです。人間は意図と意味を持つことによって身体をつき破り、意味を理解すると共に意味を創造するようになります。さらに人間は意図を持ち、その意図がすべて内に印象づけると共に外に表現する可能性を備えていることによって、否定的性質を備えた価値と共に肯定的性質を備えた価値が発見され、その価値が実現されるか拒否されるかするのです。

既に申し上げましたように、ここで述べた多くの前提条件の中に、人間の言語や人間の表現が含まれています。この言語や表現は人間の身体を前提にします。しかしこれも既に述べてきたことですが、人間はこの身体から抜け出すことが出来ます。そしてこのことは最も単純だが人間だけが持つ能力（例えば言語）でもあり、別の言い方をすれば、人間の最高の可能性（例えば最も深い確信）でもあるのです。そこでは、人間の多くの側面は、身体つまり生命の限界を越え、最高の意図において統一され、生の実現をもたらすのです。

人間はこの発見を、宗教や愛や芸術や英知という様々な形式を通して、自

己自身と同胞に示します。人間はこれらのいずれも実現出来るという自信を喪失することがあります。それに対して我々は、提供出来るものを与え、受容出来るものを受け容れよ、と答えます。それは愛と呼んでいいものでしょうか。それとも「それ以上のもの」とでも呼ばなければならないのでしょうか。ともあれ我々はお互いに次のように祈ります。あなたの最高の応答をもって、正直に無私な心で完全な信頼をもって、提供出来るものを与え、受容出来るものを受け容れよ、と。このことを表現するシンボルとイメージは多種多様です。しかし人間よ、あなたは独自の者であり、あなた自身であるので、謙虚にそして現実に、あなたは有用な者であると主張してもよいはずで。このことは、悪いもの無価値なものに対してではなく、あなたが真にその価値を認めたものに対して、あなたが役立つと現に決意し、役立っていると現に確信していることを意味します。あなたは自分の有用性を提供することによって信用と信仰を示し、希望を与えることとなります。その際、あなたは信仰と希望の両者を創造しているのです。そしてあなたの提供するものが最高に役立っているのです。

（モラロジー研究所研究員 北川治男 訳）

ここに訳出しましたのは、M. J. ランゲフェルト博士が1979年11月13日にモラロジー研究所にて、同研究所研究部主催の公開研究会で行なわれた講演です。翻訳にあたって望月幸義研究員にご教示いただきましたことを感謝致します。しかし訳文の文責は訳者にあります。

## The Meaning of Human Life

M.J. Langeveld

It is an old saying in European philosophy that man is a “*rational animal*”. If it is right to call man this, I am inclined to say that this means that man is *no* animal but a self-made rational “creature”. But I also want then to say that being rational is not enough for being “human”. Man may be “rational”, but ... is he *reasonable*? It is rational to see the limits of man’s ratio, man’s intellectual, cognitive, logical thinking. It is more than that to be reasonable and that would mean in this context: to develop humility and to consider *other* aspects of man’s soul than his *eventual* rationality. Man might ask whether he can really know and understand everything in the activity of human *ratio* only. Does he make his life in *love* and devotion, in *moral* truth, in the *beauty* of arts, in the *reliability* and *responsibility* of humanly social relationship, in the knowledge of *rationality* only? Or is there *another* aspect of man’s person, of man’s mind and man’s “heart”? Is there not only “rational intelligence” but also “*sensitive* intelligence”? Is there not only rational thinking but also *wisdom*? Not only the truth of rational arguments but also the truth of sacrifice, of faith, of faithfulness, of

loyalty? The “truth” of beauty in nature, in arts, in the history of man’s life? Is in the culture of the Greeks who invented the idea of man’s being a “rational animal”, not also the truth of the great tragedies of their great drama-writers, and the truth of epics of their great poets?

Is it perhaps justified to say as I allowed myself to say a long time ago already — that the *end* of Christianity *began* in the year 325 after Christ, when a council of Christian theologians came together and formulated the dogmas of Christian theology and of what they considered to be Christianity in such a rational way that from then on dogmatization became too rationalistic a process? Too rationalistic to be compared with *human dignity*.

The Greek tradition in philosophy as well as the Latin tradition became from early on a strong rationalization, which in spite of later Protestant ideas, in spite of a growing process in human sciences, is strongly supported by the development of the sciences of nature and of mathematics. And from *these* rationalities *human dignity* does not take its origin.

Man, from very early periods in the history of all culture we know of, reaches further than ratio, than rationalization: he sees over the bridges of his rational mind into the world of things hoped for, into the evidence of things not seen, into the world of religion, into the world of the un-understood, into the world of faith, the world of sacrifice, the world of mystery, the world of love and unselfishness, the world of beauty, the world of human devotion to goodness and honesty. Man sees those bridges to man’s highest dignity and to man’s deepest failure.

From now on it is evident that man’s most triumphant realization of man’s life will never reach man’s highest vision of what he and his world could be: — if man could not *really* pass over these bridges the mind can see, the heart can know. If ever man could reach this in complete reality,

he himself and his world would be *perfect*. “Perfect”: that means *completed*. They could not be better.

Well, ladies and gentlemen, pardon me: but it is my sincere conviction that no purely-and-only *rational* creature could ever believe that man could make himself and his life and his world “perfect” in the sense I tried to indicate. — *But*: at the same time it is my sincere conviction that man in his deepest humility and highest devotion has to try to go this way to the world of the more-than-human, the more-than-rational: the world of the Absolute Value. And we know how in the old Latin language it was already very clearly said, that things have their *value* by *quality* not just by quantity or rationality.

And now let us direct our attention to man: of everybody there is only *one*. Of every child there is only *one*. So we *must* say: *be* that *one*. For that means: be your real quality. Only then we can live *our* life, when the other humans are directed to the World of Quality. And rationality may serve us, but we will not direct our soul to this only: it may help. To give it its *instrumental* place. As we are doing at this very moment, we meet in a place where we planned to be: a rational decision. And we use a language for our contact which by competent help serves us on both sides. I try to explain my thoughts in a rational way. And even on this way it becomes evident that human reason by being rational opens our eyes to the borders.

So, ladies and gentlemen, when we ask ourselves the question, what the meaning of human life could be, we have to go through a difficult problem. First of all: life has not just a meaning for the living person himself only and he must realize that. What does my life mean for my parents? For the person to whom I am married? To my children? To my friends? To my colleagues? etc. etc. But there again there are *several* meanings also in the *same* relation: a person may be positively accepted

for his personal qualities of various sorts but he may *not* be positively accepted in his qualities as a craftsman or as a citizen, etc.

Now you know: man is a vulnerable creature, and therefore: there is a division in tasks, not only biologically as between man and woman, but also between labour-tasks, between crafts, etc. and between helping and leading, between the helping and the helpless, etc. Man's life is consequently based on all these different tasks. Being an effective, a competent helper for the vulnerable human being then must be one of the essential meanings of his life. And although no helper never will need help himself, as he is a human being also, his primary task will be not only to be a good and reliable helper but also: not to create *himself* as a person who would need more help than the strictly inevitable help everybody might need. So man has to be able to help himself and he must be prepared to help his fellow-human beings.

And here a whole set of answers and tasks of man are showing up: responsibility as well as attention for man and mankind, willingness as well as competence to help, show themselves. But man has to accept a good deal more, when these many facts will realize their *real value*. So he has to work together, to co-operate not only in groups but also his attitude of *willingness*, his *social co-operation* show themselves as inevitable values. And we *may not exploit* other peoples' willingness to help and co-operate. But the helpless: the young child, the old person, the invalid and so on, they must be safe in our world.

One thing we must not forget, I believe, namely that man is not called into life by himself. The responsibility *began* with his parents. And education had to teach him *two* facts: the one is that he has gradually to take the responsibility for himself, and the other is that *his* children are born to *his* responsibility. And "responsibility" is a *good* word: it says that we have to *respond*, to give an *answer*. Well this answer must be

reliable, true, honest — for otherwise no person could live in human relationship. We must see human life first as the *meaningful* answer to its real fulfilment. Man's life is not just only a biological process, a mechanism of living, it is a realization of man's best possibilities.

All too often we see that man is not devoting himself to his best, his highest, his most urgently needed possibilities. All too often he is neither active at the basic nor at the highest tops of his valuable possibilities. He *profits* from other peoples devotedness. This may be his privilege in love or in *powerlessness*. But he has always and primarily to offer his own *availability*, his own *competence*. And so he has to try to develop his competence. And in education we have to educate, to form his competence. In his creativity he is not dreaming away into the empty air but he is making, stimulating, supporting or leading this creative availability from the simplest service up to the highest moral, religious, esthetic, social values. All this is not *rational*, or not just *only* rational, it is making man's life of a growing value or of the highest *value*. We can live in the merely biological sense on a much lower level of achievement and it can be inevitable to accept it sometimes, but we must try to go over the bridges into the world of the higher, the better, the more valuable. Man's life now grows from a mechanic or a minimal process into his highest fulfilment. His responsibility for his own life as well as for other peoples' life and for the life of his children now grows into its best and highest values. We have several times used the words "meaning" and "value" and we must now give some attention to the fact that something very remarkable is happening, when man is directed towards meaning or value. He then leaves the boundaries of the body. Let me explain this.

When I point with my finger to the sun, the person who understands the *meaning* of my pointing finger, *looks away from* the finger and follows with his eyes the *direction* towards the object I am pointing to.

This object itself is a visible object, namely the sun, but so is my finger — in between is the invisible line, the invisible meaning of my pointing finger. So is the meaning of words an abstract way sometimes referring to most concrete things, sometimes referring to most abstract ideas, to most difficult notions — so when I speak of “God” or of the beauty of a piece of music or to the complex construction in mathematics. Man breaks out of the limits of his body in the meaning of the many things which he can indicate with his words, with his singing voice, with the hands or the arms expressing respect or religious meaning. But he makes himself understandable by his fellow-men through the words he uses, the pictures he paints, the music he produces. His fellow-men can often find their way to the deepest meaning, to things they never thought of themselves. The expression of his face or his eyes explains much of what he does *not* say.

But, ladies and gentlemen, what we call “cultural life” and its “history” are two ways of indicating great products of man’s building up of the human world in its deepest, most impressive as well as most tragic meaning. The great as well as the tragic products of man’s worlds of meaning have their cultural and their historical context. They give man their specific replies of *their* specific worlds of meaning: each cultural world, each cultural aspect offers man impressive products. These products of culture have their meaning for a community as well as for a history as well as for individual persons. And in a time like our own we see that in many parts of the world the cultural contexts have fallen down, have lost their dominant meaning for many persons. Man in our times has often lost his *openness* to — for example — religion, his *openness* to arts of his own country in former periods, his *understanding* of other aspects of arts or his openness to the history of his own country. And — ladies and gentlemen — it is not so difficult to take away from

man what has made him happy or what has opened for him his entrance to the deeper problems of mankind. But when we have spoiled this for man, what can we offer him of an equally high quality? In our times we may say that all too often we do not give him back anything of a high quality or of a deep wisdom. We leave nowadays only a short period to the young people to learn the deepest or the highest — and then: we are astonished to see what takes its place: the immature opinion, the aggressive annihilation, the increasing delinquency, the pretentious and rigid opinions in the fields of society, economics or politics.

Yet — all this has a long story. Already a long time ago, in the eighteenth century there was a new word made in which man’s risk of losing his understanding of himself was expressed: “alienation”. A long time later, the western philosophers had formulated the problem of man losing his religious understanding of his world. In the early nineteenth century, they said “the God was dead”, “Gott ist tot” and a politician and economist somewhat later, a certain Karl Marx, spoke of the “Entfremdung” — again the “alienation” of man: man who had lost the understanding of himself. And more and more man begins to go back to the purely rationalistic attitude: he believes again and more and more that the rational will solve the problems of his existence. Our times show again this overestimation of the rational only. Soon we’ll play in the lottery and find the most immediate person we love by a statistic gamble only. In that way we’ll forget more and more completely that the profoundest creation of man is his *discovery* of the meaning-and-value of *his life in love and devotion*, his completest self-surrender to *the sincere safety* of man in the world of man. Safety in life, in weakness of the child, the old, the invalid, the poor, the helpless. “Safety”, however, not to *spoil* him as a spoiled child whose character and personality are ruined by indulgence, by giving free course to all his wishes, passions

and pleasures. No, safety also implies the safety of man for his own self-indulgence, his ego-centric self-centered primitivity, childishness and arrogance. Safety is also the safety of man against despair and hopelessness. We, human beings, realize the aim of man's life only in the safety of our fellow-men. Not only in physical safety but also and most essentially in our respect for man's creation of the simplest up to the highest values in the meaningful action, service, creativity in all fields of human possibility. So we might say that it is the deepest sense of man's life to be available, not just as a servant or as a master but as person who helps the helpless. And the person who says that he loves another human person, has made it most concrete in reality that he from now on realizes the *touchstone*, that by which he will be measured: not in quantity but in quality.

And how do we define his "quality"? By his *reliability*, his being trustworthy. Even Christ on the Cross lost his belief when he said that God had left him; "Eli, Eli, lama sabachthani": "My God, my God, why hast Thou left me?" When we find these words in an old book, so holy for so many people, we must realize that the person who spoke those words has found the love of many generations of human beings. They must have meant that the *deepest* despair of man was expressed there and *they* wanted to stand at the side of this person in his deepest despair: this person killed by other human beings, this person betrayed by man, this person who even understood his experience of *being killed* as a decision of his God.

I do not mention this as a kind of preaching, of religious preaching. I only mention it to show how deep this problem of reliability and human despair is connected with man's deepest convictions in a particular religion. It is only used here to illustrate that we are speaking about an aspect of man: his vulnerability, his *need* of reliability in help, in sup-

port. Man, this creature which has such a high opinion about himself as the most rational animal, is the being that should know *deeply* also of his weakness, his helplessness.

And so, ladies and gentlemen, the aim or the aims of life must be seen in this light of man's helplessness. Don't let him *over* estimate himself! We, human beings, *need* one another. And so reliability is a primary aim. But what would this imply? If a person is reliable he must also be *competent*. And these two are immediately connected with man's understanding of his *responsibility*. For reliable competence produces new discoveries and new presuppositions of responsibility.

When I bring reliability, competence and responsibility together in man's most evident and man's deepest helplessness, I wonder whether I could bring together these three aims in this specific relation to man's helplessness in *one* word. If there is *one* idea, *one* reality of this quality, we must — I believe — say that the aim of man's life is *love*.

*Love*, not necessarily "sex", not necessarily "falling in love", but the unselfish, deepest devotion to man, expressed in being *available* in responsible, competent and reliable realization.

When we speak of (1) reliability, (2) competence, (3) responsibility as indispensable presuppositions for the realization of the aim of man's life, we bring these conditions together under the name of "love" in the meaning of man's unselfish devotion to man.

In order to make it clear that we do not mean man's egocentric self-concentration, we also add the quality of his *availability*. So we come to an attitude of human active life in a unit of *four* qualities: reliability, competence, responsibility and availability.

We might now add some remarks to specify somewhat the meaning of these words and the consequences of this meaning. May I first of all say something about *competence*. Those who would ever call themselves

“competent”, should also think of very simple tasks. For such simple tasks may help man to become a person who can achieve the most primary tasks of life: he can eat his own food, he can keep his own body clean, he can go on his own feet, say his own words, etc. However the demands of competence grow with the years — and so the *limits* of his competence come nearer in many respects. This has the consequence that the surrounding world must be helpful first on an elementary level, then on an ever growing complex level of required capabilities. This implies that the growing child is more and more dependent on the educating world around him for growing up into a *less* incompetent human being. And it is an aspect of *adulthood* that we recognize in many respects our dependency on *other* peoples’ competence. So competence and modesty, modesty and co-operation go together. This presupposes our *reliability* in offering our competence and in inviting co-operation at the right moment for the right task. The reliable person not only knows what he can but *also* what he *cannot* do. And here his responsibility shows up clearly: it is evident that the reliable person, understanding *his* competence as well as its limitations, is *responsible* for his intervention as well as for his call for help.

But responsibility is a much more complex attitude than expressed only in this co-operative process, for we act in many most essential cases or we neglect our action in most essential cases, where we take the responsibility — for example — for human life or death, without being able completely to understand what we are taking upon *our* responsibility. And so the competence also becomes more and more many-sided. The pretention to be a competent adult requires more and more the confrontation with the many tests-of-life. For man and his society nothing is more dangerous than this *uncontrolled* test. And so from the first moment on, the *responsibility* is of highest importance as an aspect

of education as well as an aspect of the *self*-education of man. Every aspect of man’s life’s aims calls up this question of competent-responsibility as a basic aspect of man’s *reliability*. And nobody is *available* in a *responsible* way who is pretentious in these respects. His *reliability* is presupposed. Only the *reliable* person lives, loves and works in competent *availability*.

So here we may say: in *this* unity which implies our *complete* personal devotion I see the aim of man, the aim of education and the essence of being an *adult*.

When we analyse the meaning of human life and come to the conclusion that *responsibility*, *reliability*, *capability* are of highest value for man, we also have discovered at the same time a few more things: man’s *vulnerability*, man’s *sensitivity*, man’s *rationality*. And we see his tasks in these matters as his most essential aim in education and self-formation. Otherwise he would not be really *available* for his life-commitment.

We now could say that these seven aspects are brought together in a creative process:

- the creation of the human *self* and the human *world*;
- the creation of a living together on common as well as on personal responsibility;
- the creation of the world of *expression* and communication in the human person and his *moral values*, in *religion* as a living world concept, in the arts, in the human relations.

And all this brings us back to man’s breaking out of the body: in his *intentions*, in his *language* as expression and as a means of breaking out of his limitations as a personal subject who expresses *and* who understands. In his intentions, in his meanings he breaks out of his body in *creating* meaning as well as in *understanding* meaning, and in his in-

tentions and all their possibilities of *expression* as well as *impression*, the *values* of positive as well as of negative quality are *discovered* and turned into reality or *refused*.

To the many prerequisites here belong — as we said already — human language, human expression. This presupposes the human *body*. But — as we have seen too — man can break out of this body and this is in one way a most simple *but* only human capacity (e.g.: language), in another way this is man's highest possibility (e.g.: his deepest conviction). There, his many aspects are brought into the unity of his *life-realization* in his highest intentions, surpassing the limits of his body, that is: of his life.

Man offers this discovery to himself, to his fellow-men in different forms: in religion, in love, in arts, in wisdom. He can lose his trust that he will ever realize anything of all this. Our answer is: come to *meet* what we can *offer* and what we can *accept*. May we call it Love? Must we call it "More than that"? But, we pray one another: offer it and accept it in your highest response, in your completest reliability of honesty and unselfishness. The symbols and images of this are manifold, but *You, Man*: You are unique. You are *Yourself*. *Make it justified that you are available*: in all modesty and reality. This means the reality of your choice and judgement of being available not for the bad or the worthless but for what you understand honestly in its value. Your offer of your availability shows trust and faith and it offers hope. Then you *create* both: faith and hope. And your highest offer *is* available.